WASON
HQ
1104
J74+

THE WOMAN'S MAGAZINE.

明治二十年十一月十二日刊行

女學雜誌

第八十四號

毎土曜日發兌
一冊正價五錢
府内無郵送税

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

附録 木村鐙子肖像 壹葉

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 84. November 12th, 1887.

第八十四號

EDITORIAL:—On the Novel: No. III.—How to read Practical and not Romantic Side of Novels?

LEADING ARTICLES:—Translation of a Lette from Miss Marry Elkinton in Philadelphia; Aim of the "Woman's Christian Temperance Union," by Dr. Verbeck.

MISCELLANIES:—Love between Brothers and Sisters.

CRITICAL NOTICES:—Mrs. T. Nakashima's "Zen-Aku-no-Chimata" (Good or Bad), New Novel.

BIOGRAPHIES:—Prascovia Lopouloff; Miss H. Kimura.

NOVEL:—"Fragrant Rose." (concluded).

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

●社説 小説論第三（小説を讀の覺悟）

●論説 日本の姉妹に告ぐ（エルキントン）婦人矯風會の目的（博士フルベッキ）

●叢話 中嶋湘烟女史善惡の岐の評○兄妹間の愛

●佳傳 サイベリアの女傑○木村秀子の履歴

●小説 薔薇の香第十七回

●寄書 明治女學校獻堂式を祝する文○慈善の利害○婦人衛生會

●新報 二十件

WOMAN'S BIOGRAPHICAL DICTIONARY.

ABRANTES, Laure Permont, Duchess of, Writer of Political Memoirs, Wife of Junot B. 1784. D. 1838.

ADELAÏDE, Princess of Orleans, Sister of Louis Philippe. B. 1777. D. 1847.

ADELAIDE, Saint, wife of Lothaire II., King of Italy, and afterward of the Emperor Otho the Great. B. about 931. D. 999.

AGNESI, Maria Gaetana, Italian scholar. B. 1718. D. 1799.

AGOULT, Marie C. S. de Flavigny, Countess d' ("Daniel Stern"), French Novelist, Political writer, Moralist. B. 1805. D. 1876. "Histoire de la révolution de 1848." "Esquisses Moraels."

AGRIPPINA, Wife of Claudius, mother of Nero. B. about 15. Put to death 59.

AGUILAR, Grace, English Authoress. B. 1816. D. 1847.

ALACOQUE, Marguerite (Marie), French Nun. B. 1647. D. 1690.

ALBANY, Louisa, Countess of, Wife of the Young Pretender. B. 1753 (or 1752). D. 1824.

ALBONI, Marietta, Italian singer. B. 1823.

ALCOTT, Louisa May, American Authoress. B. 1833.

AMALIA, Duchess of Saxe-Weimar. B. 1739. D. 1807.

AMALIA, Duchess of Saxony, Dramatist. B. 1794. D. 1870.

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第八十四號

明治二十年十一月十二日

●社說

○小說論

（第三）女流、小說を讀むの覺悟の事

小說の善惡を批評する標準既に相定まらば彼の小說を讀の覺悟何如あるべき乎は之に續ひて自づからに推諒せらるゝものと云ふべし。蓋し小說には、著者が自己の意を寓して假りに人物を造り其人物等が浮沈轉變するの景況を用て隱に其意を洩らすの工夫に由て成れるものあり、彼の一個の天路巡禮者に由つて基督信徒の經驗を寫し出せるが如き、或は三人の哲學者を使つて人世の幸福を探索せしむるが如き、或は政事家の生立を叙して陰に其政治論を主張するが如き、或は奴隷の困苦艱難を寫して其の動物の如く殘使さるゝを慷慨するが如き、或は人間一心の思情を戰はせて心裡陰微の相關を明白にするが如き、或は仁義八行を人に造り勤王義俠の情を假設の人物に洩らす如き、凡そ斯の類の寓意小說は古往今來東西に其數はなはだ多し而して吾人が如此き小說を批評するに當りては別に亦た其寓意の當れるや否やを評せざる可らざるが如く之を讀むに當ても亦た先眼を此寓意の一點に着して專ら其主旨の在る所を承知するの覺悟あらざるべからず。然れども此等は所云る彼或は政治小說と云ひ或は勸懲小說と云ひ或は哲學小說と云ひ或は漠然として大業の寓意小說と片書したる則ち別種の小說に付て之を言ふのみ、苟くも小說の小說即ち小說の尤も發達したるもの更に言を換へて所云る彼眞正純粹の小說あるものに付て之を言へば、之を評するには其小說中の記事よく實際に當れるや否やを採つて之が善惡を批評すべし故に亦た之を愛讀するものは先づ之に依りて世上實際の有樣を味ふことを覺悟するを專一とすべきもの也。

吾人が世の姉妹方に對して殊に勸告せんとする所のものは即ち實に右の一事に在り。諸君が小說を讀むの覺悟も此の一點に在らば女流が小說を愛讀するの習慣は或は轉じて以て其の利益とあし庶幾くは其弊害を未然に防ぐを得べきかと思考す。例へば彼の書生氣質、妹と脊鏡、浮雲の如きは近年出版の小說中所云る純粹の小說部類に屬して略ぼ第一位に列する所の名著あらん然るに此の三書は發賣の高相應に多かりしに係はらず評判甚はだ寛しからず士君子中往々之を嫌惡して手にだも取らざるものあるを見受く、中にも彼の書生氣質の如き

は小說の尤も野卑なるものとして公けに之を論ずるものあり堂々たる論者にして眞面目に之を不道德視して慷慨するものもありたり、成程吾人は書生氣質中の人物を悉く惡むものなり憫れむものあり嘔つく程に嫌惡するものなりと雖ども此樣の人物現に今の書生社會に甚はだ多きを見れば遺憾ながら此書を以て能く其實際を寫したる一個の小說なりとして几上に擧ざるを得ざるなり吾人をして若し此書の著者に向つて不平を寄しむるものあらば吾人は著者に對して言べし君は何故に書生社會更に高等の人物數多有之を悉とく放棄して徹頭徹尾かゝる小人怠惰生をのみ拾ひ集めたるか此書に題して當今の書生の氣質なりと云はゞ世上には道德に進まんとして情慾と戰ふ所の學生あり名譽と戰爭して顚倒起伏する所の學生あり哲學に凝つて人情に迂ときものあり、人情世態に走つて學課を輕んずるものあり、凡そ靈の上に於て心の上に於て情の上に於て千態万狀の經歷に遭遇するの書生甚はだ多し著者は何故に此流の人物の氣質を寫さずして單に肉慾界に彷徨する下等最末の書生をのみ書中の主人公とは爲したる、此一事著者の爲に尤も惜しむべしと雖も然れども上等の學生を寫さゞるが故に則ち下等書生の狀態を盡したるの功能を沒すべきにあらず故に吾人は文學士坪内雄藏君の書生氣質は明治年間の尤も下等なる書生の氣質を寫し得て妙を博したるものとして見るべし之を以て此書を吾が文庫の中に藏することを恥ぢと爲さゞるものなり。左れば今ま玆に此の書生氣質を玩讀するものあらんに其人もし之を讀んで以て當今の下等書生の狀態を味ふことを覺悟せば此書の道德何如に低しと雖ども敢て害なし何んとなれば讀去つて世間に實在する實際の書生風を知り得たるの德あるがゆゑ也、然るに若し誤つて此書の道行趣向を專らに着眼し小町田は美人の愛を得たり其の相思相愛の道行此如ありし彼の如くありしと注意して其心を只だ此の一點に向け以て彼れが一身の出來事を面白しとするの思ひあらば此人や既でに著者が妄想に惑はされて世に有るまじき若しくは自身一己に在るべからざる出來事を慕はしく思ひ做し知らず識らず奇異變化の生涯を望んで身も亦た小町田たらんことを欲するの過ちに陷いりたるものなり此に至つて輙はち小說を讀むの弊害初めて起る。

殊に憂ふるは女性の性質感情に富んで奇異變化の生涯を慕ふの氣風多きとなり故に其小說を讀むや大抵書中の道行變化に注意して假設の人物の榮枯盛衰に涙を垂れ美人才子の遭遇に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

胸を轟かし身も亦た之と同樣の境界に出で遇れんとを知らず識らず願望するの思を起す、左れば女流の小說を讀むと彌よ多きものは世にあるまじき出來事を望むの信仰いよ〳〵增長して妄想徒思いたらざるなく心中に一個の理想才子を造り出して世上の男子を悉く之と比較し彼も不可なり此も不可なりと選擇するの長日月空しく去つて端なく其身が白髮の老婦人たるを知らず此に至つてか或はヱリサベスを學んで頰に紅し或は小町の不幸を察して路傍に古への盛時を懷ひ起すの歎あらんとす其過ちや元と小說を多く讀みたるの罪に歸す否な多く讀みたるの罪にあらず小說を讀むの覺悟を誤りたるの罪に歸するものなり。

此故に小說の物たる必しも道德上に惡むべきものにあらず之を讀むの樂しみ必ずしも悉く禁制すべきにあらず、若し能く小說を批評するの心得を承知し且つ之を讀むの覺悟を有して而して閒暇あるとき之を玩讀せば之に依て世上の人情世態を盡し其身僅かに二八の經歷にして既に人世の隱微極りなき人情を味ひ得るの効能あるべしと雖も滔々たる小說の愛讀者及び特に小說讀者第一の花客たる吾が女流の諸君は大率ね此等の心得覺悟を棄てゝ小說の皮膚を味ひ爲めに大弊を受くるものなり悲しまざるべけんや、此を以て吾人は事理を辨ずるの姉妹に非ずんば寧ろ一切小說を讀むとなからんを勸告するの至當なるを信じ、現に既に小說の玩讀にふけつて之を棄てがたきものは必らず能く小說を讀むの覺悟を承知して彼の大弊に陷いるとなからんを勸告するに於て止まらざるを得ざるを懼む」今まや小說大に流行して小說の讀者特に女流に多し故に遂に此の篇を草して少か姉妹の注意を惹くにいたると云爾。（完了）

● 論說

○敬愛する日本國の姉妹　（米國費府）　エルキントン

左の一篇は米國フヒラデルフヒア府のマーリー、ビー、エルキントン孃より遙かに我女學雜誌に寄せて本邦の姉妹に告ぐる所あらんとするの文なり孃は兼てより敎育に熱心の聞え高く平素斯の途の爲に力を盡し種々の敎育雜誌に投書せらるゝとなどありと承れるが今亦た太平洋を橫ぎりたる日本國の女流に對して此の言あらんとす信切眞に感佩すべきものなり

社友　（在濱）　好道女史　譯

數年前より貴國と亞米利加との交際益す繁げく相成候に付き

愛する姉妹等の御上を屢ゞ思ひいたし候。扨て兩國の婦人等の交際致し候と共に必らず互ひに相及ぼす感化力之れ有るべく候得ばたとへば智識にもあれ風俗にもあれ人をも吾をも益せんとする高尚なるものゝみ互ひに擇らひ得たく希望いたし候。

吾等が愛姉等につき學びて益ある事柄もあるべく又開明の名を慕ふる吾等なれども辨別取捨することなく其開明と唱ふる者を其儘取用ひ候ものには利害得失之れあるべくと懸念いたし候ことに候。吾等の仕來りの中にて愛姉等が擇ひ玉ふる方よろしと存じ候事數々有之候て到底此の限りある紙面に載せ盡しがたく候へども先づ吾等の誤ちと見へ候ものを擧げ候へば衣服の流行すたり第一の事に候、扨て此事に付ては質素の點にては吾等の服裝に優つたる從前の日本服を其儘用ひ玉ふか又は便宜と健康との需めに應じて多少の折衷なされ候て用ひ玉ふ事を切望致し候。固より服裝は便宜と健康とを主眼にいたし候筈なれども米國婦人中に此等を後にするもの間ま有之候過分のヒダ飾りを裝ほひ候が爲め脊を痛め或ひは奇しく巧みに組立てある身躰の釣合を損じ又は腰を壓縮いたし候より引起す苦痛病弱を子孫迄に及ぼし候も尠からず候。斯の如きは愚かしきのみならず實に罪ある仕業と覺えず候や。然かも申し候へど婦人たるものは其服裝に清潔を保ち相當の嗜みあらんとは緊要と存じ候。然し此の短かき生涯に衣服流行に指揮束縛いたされ候へば繁雜なる他の緊要高尚なる事業に從事する暇を殘し得まじく候。

私し事何れ遠からざる中に智育上德育上社會を益し世を惠む事に身を委ね候婦人の履歷を草し御一讀に供え度存じ候。此等は眞に吾等の規範と爲すべきものに候。愛姉等も亦た各々備え玉へる才能を御發達相成候れば右の婦人と同じく他を益し人に愛され玉ふと疑がひなく候。

私し友人の嘗て申し候言葉に「吾等つとめて人の安全を計り人を慰さめ助くると己を忘るゝに至るべし」と御座候、數月前此の婦人の世を去り候のち曾て教育いたし居候數十人の少女相謀り候て補助會なるものを組立て彼人の紀念の爲にいたし候、此會は名義の通り會員たるものが一生涯力の及ぶ限り人を助け惠むとを契約いたし候とに候、此婦人一人に基づきて波及いたし候感化力も亦た何如に大ならず候や、家庭の内にひそかに施こせし感化力も甚だ力あるものに候、婦女子たるものは別して其子女の幼けなき時より万事見傚はれ其感化

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

力の善惡は大ひに將來子女の人と爲りに關係あるのみならず其結果は他の家庭並びに世間一般に推し及び候事を思ひ候へば吾等婦人の感化力の善からんとは何如に願はしからず候や私し知己の婦人の嘗て語り候に妾が世に出でしより此上もなき喜びを覺へ候は妾が弟の一日わが前にひざまづき嘗て妾より受たりと云ふ德義上の感化を謝し世の少年果してわが姉の吾を敎へ導びき玉ひし如く其母或ひは姉妹に敎へ導かるゝを得ば惡を避くると何如に容易く世を益せらるゝ事何如に大ひならんと述べ候時にて候ひきと。

基督の嘗て定められ候條理を守り候國人ほど婦人の位地を高め候とは愛姉等の御諒察相成候ことならん、基督敎には男女の等を隔つることこれなく候吾等男女同等を主張するものなれど男子に爲し得る所は女子必ず爲し得べしと申すには非ず但だ男女各々性質に懸隔あるも兩性兩樣一致合躰して完全いたし候と申す迄にて何れにも劣り優りありと申すには御座なく候、愛姉等よ愛姉等が權利を主張し玉ふに外面に威勢を示し玉ふは必要にあらず確固たる心術と行狀に男子と同等なるを證し堅固なる志と高尙なる業に獨立を示し玉へ。

基督の定め玉ひし高尙にして純粹なる條理に從ふものは男女に係はらず其世渡り益す美くしく相成るべく候然し基督敎國に住むもの悉く基督信徒なりと申す可らず候、米國にも他の國々にも基督の敎を善しと見止め候も樣々の我儘より之を遵奉いたさゞるもの之れ有り候は敎徒の甚はだ歎ずる所に候、尤も眞の敎徒たるものは啻に基督を智覺上眞と信認し候のみならず惣べて其の命令を遵奉するを要し候。

神の基督に依つて其の御旨を現はし玉ひし事並に基督の世の人を愛して爲めに死し玉ひし事を聞しことなきもの多く御座候然し神は人の心に神を知るの智識を植附置き玉ひたれば尊つとくして惠みある主宰の居ますことを悟り其靈を心に受入るゝものは神の子と爲るを得べしとのことに候。固より基督の降誕贖罪の事を聞知らずとも樣々の名義によつて此神を禮拜いたし候ものありと信じ候へども尙ほ基督と神に同一なる心を淸むる聖靈の力を各の經驗上より悟られんことを切に希望いたし候。實に此の愛の宗敎こそ人の世渡りに滿足、喜悅、信仰並びに安心を得さするものと信じ候。

愛姉等眞の信徒の身に交はり玉ふこと到底未だ適はざるとも善を採り惡しきを棄つる辨別あるよう且つ各々己れの感化力を宜しきに用ひ愛姉等も吾等も共に救世の眞理を敎へ導びかれ

ん樣希願いたし候也。

○婦人矯風會の目的（十月廿九日婦人矯風會厚生館大演說）

博士 フルベッキ 演述　佃 龍雄 筆記

此度の演題は婦人矯風會の目的で御座りまする私が此會の目的を論ずるは誠に不適當のことゝ思ひます一向私は婦人樣方の有樣を委しく調べたとは御座りません一體私は帝國の女中方の風俗のことは委しく知りませんので御座います故よ色々の大切なることを稱美し或はこれを非難するとは私には出きんのです茲に罷り出てたのは強て演舌して呉れと願はれまして參つたのですがドウゾ知らぬとても何にか道理上の未熟なる意見ヤア素人の話しとなるので御座りませう。（ノーノー）先づ此會の目的と云ふものは誠に必用にして至極よろしい目的であると論じたいと思ひます此目的がナゼ宜しいかと云ふに帝國中の今の婦人方の風俗が古くなつて時世に適て居りませんもので御座ります世に遲れたるものであるから是を深く云ふと改良しなければならんで御座います（ヒヤ〳〵）今日の婦人方の風俗はドコから起ッて來たかと云ふに中古から起ッて來て今日に傳ッて來たものだから今日の時世には能適ひません不似合の所があります（謹聽）何ぜと云ふに女の仲間の方位と云ふものが全く變ッて來たので御座います今迄の婦人の風俗と今の社會とはグルリと變ッたもので中古の方位と明治二十年の方位とは全く相反したる如く違ッたもので御座います故に今日の風俗は改良しなければ成りません。婦人方の風俗の變動の原因と云ふものは其委しい所を申せば先づ一ツは佛敎で御座りませう中古より貴國には行われました此佛敎に熱心なつきは男子では無い重に婦人方でありました。けれども其佛敎と云ふものは昔しは甚に盛にして立派の者であッたけれども今は幾分か末になつて居る今日は佛敎の勢力隆なりと云ふとは出きますまい。と云ふは方位が變ッたからで此方位に合う樣に改良しなければならんで御座りませう（大喝采）婦人方の風俗を生じたる所又原則を擧ぐれば儒學であります婦人方には至て儒者が稀れでありますが儒者が女を見るときは儒者の心で儒者の考を以て婦人を見時は丁度上から下を見をろす事でありました（大喝采）君主が臣下を見如く主人が手代を見樣な鹽梅です（ちと云ひ過たか知れません）果して儒學は如何で御座いませう昔しは孔子孔子〳〵又孔子孔子以前に孔子なく孔子以後に孔子なしと申された（大喝采）今日はソウでない先刻津田君が孔子曰くと云たら聽衆はお晒なすう

た孔子はモー往ません(喝采)中には外國人が感服する程のヿもあるが今日ではこれを勉強するものが有りますか學問するヿは其事柄を知り身に行ふために勉強するのですが此目的の者はモゥ無いではありませんか(喝采)それから又婦人の風俗をダン／＼拵へた所の方位の中に一ッの大切の元素と云ふは封建の法で御座ります封建は二三十年前の政度でありますが今は全く無いで御座います其換りに較道理に適ッたる政躰が開らけた是れから三年過ぎて明治二十三年になれば立派の政躰に改まるとの事ですされば封建の法は今日に廢棄されたもので御座ります玆に不思議のヿが有る私が貴國の昔しの歴史を讀んだヿも御座りませんけれども或人に承りましたが封建の法が未だ開けぬ起らぬ先きは女が尊く御座りました貴國では封建の爲めに女の品位は大層低くなり却て卑しくなつた由を承りました尚ほ極く細かな所を申せばイロ／＼御座りませうがマア此佛道と儒道と封建の勢力に據て女の風俗が出來たが此三ッの者は今は過ぎ去ッたものでモゥ昔しのヿとありました或は過ぎ去りかゝつたもので御座います決して勢力ありとは今日は申されません。

此矯風會の目的と云ふものは誠に必用にして至極よろしいもので御座りまする併しながらまだ外に理由があります此會の善きヿの證據が御座りまする進歩の大濤がダン／＼太平海をわたりまして遂に貴國の海岸に衝突て來たので御座います全國中動いて來ました洪水が全國中に溢れる樣になつて進歩改革改良などが盛んに誠に隆盛に爲りました(大喝采)誠に歡ばしき世の中となり社會はミンナ動いて改良を受けて進歩する樣になりましたが此人間社會貴國の社會にて大切なるものは婦人方で御座います社會が改良進歩するに婦人方のみ進まなかつた時は何う云ふ社會に爲りませう(大喝采)是非とも社會と共に進み人間社會を動かす濤に從ひダン／＼尊き方に進むとは矯風會の目的で御座ります。

又一ッには女の社會の進歩と云ふものは男の世界から來ッて居る男から進歩する樣になつて來たので御座ります然るに若し男子は進歩するも婦人が一所にならんで進歩せぬならば其間が誠に不釣合の者でせう男は十九世紀の文明ある明るき中に立て女は中古の野蠻なる暗き所に止まつて居るならば如何なる社會と相成りませうか(喝采)男女倶に並んで進歩すると云ふヿは是れ當然のヿで御座りまする。

或人は思ひます女と云ふものはドゥして居ても濟むものであ

る男子が若し進歩するならば婦人方も從で行かるゝことゝ思ふので御座りませうけれども彼は女の大切なることを知らないのです万國万類其人類の半ばとは婦人の世界です或は過半數あるかも知れない若し婦人が此世の中に無かッたならばドコで男子が現われましやう(喝采)。

イヽ聖書の初めに明かに書てある全智全能の造物主は万物を造り玉ひかねて人間を造り男女ともに造り玉ッたと書てある又面白いことが有る男の頭に在る一部分の肉をとつて女を造り玉て男の頂くべき筈ではありません又造物主は男の足にある一部分の肉を取て女を造り玉て男の奴隷たるべきでは有りません(喝采)肋骨の部分を取て造られたものであるから頭に戴くべき者でも無く奴隷視すべき者でも無く女は男子と同様同等でなければならん同等同様に進歩しなければならん。(胴から造つてナゼ同等かと叫ぶものあり)。

然しながら此會の大切なることに就てはメッタに疑を起すものが御座いますまいと思ひますが爰に一ッの困ッたことが御座ります此婦人の社會を改良するに用ゐべき方法と仕方其順序手段希望に至りますと人の說がいろ〳〵になつて居ります或人は洋服を着て靴を穿き帽子を被りますれば改良は出きた樣に思ひますが此の改良は人の假りに作つたる外面の開化で本當の文明又本當の開化本當の改良と申すことは出きません此等の事は水の流るゝ如く漸々に染み込んで來なければならん外部から中に這入るものではありません眞中から外部に現われなければならんで御座ります。

又或人は普通の教育を十分に施しますならば婦人の改良は論に仕易い者と思われますが學問と云ふものは實に尊きもので無ければならぬが學問とハ智惠を明かにし智識を廣くするものとて人をして己れを修めしむることは學問の目的でありません儒學には隨分有りますが窮理學化學などには有りません學問は尊きもので有るが道德を敎へ己れの身を脩めさせる爲めには何の益にも立ちません故に學問のみを專らにして之を改良せんとするは其志は結構だが本當の文明開化を得るとは適ひません(喝采)。

或人は西洋に行わるゝ舞蹈を婦人が能く行ひましたならば女は立派になりませう大日本帝國の光榮にもなりませう運動にも宜う御座りませう如何にも運動には宜しいで有りますけれども尊き人間、萬物の靈長たる者が舞蹈などで運命を遂べきではありません世の尊い地位に達することは出きんもので御座

りまする。

又或人ハ婦人方が此れまで餘り靜肅にして引込んで居たから往かん此世には用ゐべきでは無い活潑に世に出たら宜しいで御座いませう改良が立派に出きませう開けて參りませうと是れ亦間違ッて居る米國や英國に於て婦人の交際の自由あるは開化の原因ではありません開化が出きてから行われたもので御座ります(大喝采)西洋の婦人の交際を以て貴國の婦人を改良するとは適ひません危あい劍呑あるとで御座います(喝采)其原因あくして無理に結果を拵へるとは出きぬ出きても保ちません滅びます交際の自由は何處までも許されて宜しいが確乎した原因が無ければ隨分婦人が憚りもあく出歩くと云ふは危きとと思ひます(ヒヤ〱)。

又或人は婦人矯風と云ふとハ宜しきとだか細かに色〱の改良改革を起すとは面倒である成るべく皆一度に故風を捨てヽ其換りに時世に合ふ樣な風俗を入れたら宜う御座りませうと此人の志は深く熱心の樣に見へますが箇樣に婦人の社會を一度で改正改革したいと述るお方は色々の改良の苦勞を畏れる臆病ある不性ある人で志深きではありません熱心なるでは御座りません改良に力を盡すを惜しむもので婦人の爲めに盡力するを好まん所の人ですイヤ是れは然うではありません一切進歩の法則を知らん人で御座ります(謹聽)進歩の法理に暗らき者で御座ります(喝采)進歩には大切の三段と云とがある第一昔しより傳はッたとは宜しき所を固く守て居る第二は明かに惡しき所は直ちに棄てる第三は棄てた所の惡しき者の代りに宜しいものを入れる此三段に據らぬ進歩は本當の進歩でハありません歐羅巴各國の進歩と云ふものは此の如く漸々と昔しより宜しき方を盛んにし或は惡弊惡風を廢め或は善きものを興して遂に英國米國の樣あ盛大に至りしもので御座ります。

然しながら爰に一つ人の用心すべきとが有ります未だ其換りの出きんうちに前から用ゐる物を棄てるとは誠に危く不便なとで御座います。まだ新らしき家の障壁の出きぬうちに舊宅を壞したならば其人は何處に住居ませう未だ穿物の出きぬうちに草鞋を棄てたあらば跣足より外に仕方はありません萬事皆然うで御座います(喝采)陸軍を進歩さするにも兵器彈藥の未だ備わらぬうちは矢張昔しの弓長尖刀を用ゐて居るが宜しい若し殘らず之れを棄たあらば如何にして我國を保護するとが出きませう(喝采)學問も其通萬事渾て此通進歩と云者は一歩〱一歩に因て出來る者です或は一年或は二年或は十年間と云

へば其進歩の結果は誠に立派で御座います一偏一度でハ決して成就しません婦人社會の改良と云ものは細かの改良をせずに皆一度に大地震の如く改良しやうと云ふは實に間違ッたることで御座ります。

然れども若し或人が歐羅巴各國に於ては如何致しますか西洋では何うで御座いますか婦人矯風をせんとて何う云ふ方法を用ゐますか如何なる手段を以て立派に此社會を改良することが出きませうか此世に於ての本分を盡し如何にしたら本當の行く先きに達することが出きるかと云ふに是れは誠に申し易きことで御座います答へ難きことではありません歐米各國の婦人に就て尊き稱美すべき所の有るのは一種の特みがあるので其特みと云ふは外でハありません基督教に因るので御座います(大喝采)是れに反して開けた國の女の仲間に不便の事又色々の惡風は何處から起ッたかと申せば則ち基督教を用ゐずして基督教無きに因るので御座りませう若し人が此理由原因をお問ひなさるならば誠に申し易きことで御座ります何故に基督教は深き改良の成就を助くるものかと云ふに基督教は淺いことをしない輕いこともしない又輕々しく事をしない誠に基督教は本然の勢力ある宗教で御座ります人を盡く改めて新たにし生れかゆる樣な尊き宗教で御座ります。

左樣ならば基督教ないならば改良が出きぬかと云ふに其所は申しませんが出きることは出きませうけれども基督教に關係せずして行ふたる改革改正改良と云ふものハ誠に時も遲く其深さも淺い又其結果は誠に不定則です基督教を賴み基督教に因りたる事業は其結果が誠に嚴正したもので其深さも深く時に於ても速力に於ても基督教に因らなければならぬのは明かでありります。

又幾回も私は申します基督教は造物主の御心に從はせらるゝ者で御座ります神の御惠みに適わせらるゝ者でありますゝ造物主の意に適したる婦人の事業あらば其結果は必ず結構の結果が出きます私は幾回も申します一般に及ぼすの力あるものは學問と基督教で御座ります私共は大日本の婦人方が此立派なる高大なる二ッの翼に乘て日本の幸を計られんことを願ひます(大喝采)。(完)

●叢話

○批評 (第三十三回)

善惡の岐 (中本一冊(百五十二頁)定價五十錢 發兌所東京日吉町八番地女學雜誌社)

(48)善惡の岐は友人中島湘煙女史新作の小說にして吾が女學雜誌

社の出版する所ろなり元來吾社に於て印行したるものは一切其可否を本誌上に評せず善惡の何如の批判は悉く讀者に一任することを例規と爲すと雖ども今ま巾幗の女流中に如此き書を得たるの喜びに堪へず遂に例を破つて一言し敢て世上讀書家の注意を惹かんと欲す

吾人近來印行せらるゝ小説を讀むと尠しとなさず而も結構意匠殆んど千篇一律にして絶て人を驚動せしむるものなし曰く才子佳人曰く政談演説曰く未來記曰く遊冶放蕩曰く卑屈優柔不斷、凡そ此類の範圍を出でゝ能く人の心腸を刺すべきものなし、然に此書一個非常の男子撫松庵を以て主人公と爲す、撫松庵は冷々たる哲學上の眼目を以て宇宙を觀じ富貴愛情を度外に置て塵外に隱れたるものなり然れども時として憂鬱思切時として怒氣激發偶ま一佳人に會つて北氷漸やく溶け枯木再び花を得て歡喜將に熟せんとするとき舊惡露はれて獄中に舌を噛んで死す、殘忍豪膽果敢不拔の氣紙面に溢れ讀者をして思はずも著者の人と爲りを想像せしむ而も琴路が戀々苦思するの衷情は蓋し日本當今の男子が未だ曾て筆に現はしたることなきものあり此に至て初めて著者の温情を知る

吾人今ま書中數所の句を拔摘して著者が哲學上の冷見を示す

撫松庵云へるよう、抑々釣は自然の遊に非るのみか自然を愛するものゝ尤も爲すを恥とするものなり釣なるものは慘刻詐僞を主とするものにして若し試みに之を人と人との間に行ひしならば誰か之を詐僞なりと賤しまぬものあらんや山の自然を愛し水の自然を樂しむ山我に於て何の怨む處ある水我に於て何の惡む所ある此の怨みなく惡みなきの間無限の快樂あり唯自然を愛するものゝみ之を知る（三四頁）…

撫松庵は行く事凡そ半里程日全く西山に沒し路村落を離れてより石の鞋を噛むに非れば泥の脚を埋め老杉天を覆ひ綠草地に堆だかく人跡絶てなく愈よ行けば愈よ寂として山聳へ水激し碧岩風生じて猛虎叫ぶかと疑ふ風物騷然として夜色特に凄粛たり北山は雨を帶びて簇雲墨を流すに異らず南山は晴れ渡つて星の光燦然たり路は谿流に添ふて或は降り或は登り進むに隨つて天氣濛として衣襟濕ひ忽ち大瀑天邊より落ち豁々人の膽を奪ふ豪膽不拔の撫松庵も毛骨凛栗たり然れど撫松庵は何如なることをも怯れざるの質なれば此の物凄き景色に會して愈よ勇氣勃興し身を大瀑の邊りに寄せる、嗚呼壯んなりと自ら大呼する聲に應じて巖の下より大の男現はれ出たり（一〇八頁）…

此外或は云く一架の堆書以て繙とくべく好樓の明月好く酌むべし常情を以て之を見れば一も不足なきもの丶如し然れども不足なきは即はち不足なり、或は云く人死あるを知るとせんか決して紅顔翠鈿の中に痛哭快談するの勇氣なかるべし然れども恬として其死あるを解せざるもの丶如きは何ぞや他なし之を解せざるに非ずして之を忘る丶也、或は云く歐陽をして文成りて直ちに爐火に投ぜしめば世の歐陽の名を知るものあらず、或は云く余は人間てふものを悟りてより深夜獨行は甚だ怖れ多しと云ふが如き尋常女學者の口にせざる所也

吾人が此書に敬服する所ろ甚だ多し書し一々其箇所を擧ぐれば知らず數紙面を塞ぐの恐れあらん故に今ま卷末最後の一章中敘事の尤も有力奇拔なるもの一節を左に拔摘して全躰を推知するの便に供じ併ち少か此書に遺憾とする所を述べし

一雄は是非とも今一度撫松庵と物語り度事ありて裁判廳の許を得撫松庵を獄中に訪ふ其時撫松庵の形容は平日より一層落附たる顏色にして今ま一雄の訪ひ來るを見て眩ばし氣に嗚呼一雄君か是は能く來ませたゞ昔しは種々文壇上の物語りをも爲せしが僕も心を以て形の役と爲して幾多の歳月を經過せしが先づ永眠の日も明朝辰の刻とは定まれりと一雄も之を聞て今迄親の仇と思へば嚙付度まで惡く思ひしもさながら人の死地に陷るを見ては聊さか憐れを催し撫松庵よ汝が平日唱ふる處の運命説によれば汝が僕の父を殺して金を奪ひしも大なる恥と感ぜぬ事のみならず今ま死刑に處せらる丶事も遺憾なき事ならんが今汝は死してゆく身なれば生て存する僕が願ひ聞くれずや其義は他にあらず若し汝が口よりして余が父を殺せしに相違なしと言はぬ時は僕終生心安からぬ事にして眞に不幸の身とならん汝が今その事實を僕に告るも告げざるも汝の名に係はるとには有ざるべし若し万一汝が冤罪なるならば僕汝を殺すに忍びず親の仇と共に天を戴かざる子の義務を遂ん爲め却つて罪なき汝を殺しもせば更に他人の仇を速く者の如し撫松庵一言僕に其事實を告げ僕をして心中思ふ所ろ無らしめば汝が大罪汝が大惡余が心中より許し出し汝の靈魂をして極樂界に放たしめん見よ此一雄は乾坤唯だ一人の父は汝の手にて殺されし最と不憫なる孤なるぞ汝今ま一言其實を吐て此の憐れなる孤を扶くるとてよも惜しゝとは思はざるべし撫松庵は首を垂れ眞に君が言葉一々余が胸間に砭せり既に死罪も受けし僕に向つて何ほも其事實を確かめて後ち刑場に措かんとは

眞に君の性質こそ崇けれ（一九二頁）

著者元來詩才に富めり故に文章時として神に入るの妙句なきにあらずと雖も概するに辭往々にして調ハず文辭の美を要する小說の如きものに於てハ少しく遺憾なきを得ざるものなり且つ書籍の躰裁及び文字の校正等に就ては尤も不完全を極めたりと雖ども此の一事に關する所ろは吾社の印刷人たるものその責の幾分を負ひ之を世上の讀者に謝せざるを得ず必竟吾人は著者に向つて其彌よ文才を養ひ他日大著の成らんことを期望し且つ公衆及び特に女學に注念する所の讀者に向つて此書の一讀を要むるを得べしと信ずるもの也

○兄妹の愛

われ常に思ふやうは世の中の男女兄妹の如く相ひ交ハりてこそ初めて同等の權を得て而かも其弊なきに至るべしと眞や兄は男にして且つ妹よりも早く世に生れ出で且つ數多の便利を得て學問修業したるものあり然れども之が爲めにとて其妹を無みし妹を輕ろしむるはあらじ能く之を保護して事々につき之を愛育し彼が个弱きを助け彼が世に後るゝを憫れみ只管らに之を導ひて相當の地に進ませんと勉むること勿論ならん而して妹の兄に於ける亦た能く之を愛すると共に之を敬しされバとて之を懼るゝにもあらず之を遠ざかるにもあらず己れ元來肉身の弱きが故に萬事の保護を其兄に委賴することもあるべし然らバとて悉く之に屈從するにもあらず兄が外に出でゝ刻苦するときは己れよく內に在つて其足らざるを助け惣じて心を一つにし思を合ハせて其一家の幸福を保つことを專一とするならんか、初て之を兄妹の間の眞の交ハりと云へることあるが則ち之れ亦た移して世の男女間の交際の規範となすべき也。左れば今の女權論者たらんものは先づよく內に顧りみて其身元來よく妹を敬愛するや否やと問ふべし此人にして万一にも其妹を度外視し彼は女なり分らぬものなり意氣地なきものなりなどと冷眼に視去つて之を愛育するの念なく亦た之を己れと同等の助け手となすの望みなからんには此人安んぞ能く世間他家の女流に向つて眞正の敬愛を寄することを得んや家によく妹を顧み妹の爲めに慷慨するものにして初めて外に向つて世の女性の爲めに憂慮慷慨するを得べしとなす。此故に當今男女の交際を主張するものは先づ一家に兄妹の交りを圓滑にすることを主張すべし、男尊女卑の弊風を歎じて世の女性の爲めに心を配する者は先づ家に妹に財產分與の方を立つべし、世上の女子敎育に盡力せんとするものは先づ家に妹を學校に

送るの工夫を爲すべし、大凡そ一家内に於ける兄妹間の交り如此きを得たるのちにこそ左ては吾人が希望する所ろの女事改革初て世上に發表するものと云ふべき也。

つら〳〵惟みるに兄妹よく一致和睦して相ひ助け相ひ救ふ程に樂しきはあらざるべし、われ嘗てチャーレスラムブ、チッヂルス、ハーシエル、シドチー等の傳を讀みて其の兄妹間の交際の有樣を考へ慨然として吾國の爲に長歎したることあり彼のハーシエル氏の事は曩に本誌上の佳傳欄内に少さか其趣を現したりき蓋しハーシエル天文の學に思を密めて毎夜天界の觀測に從事したるとき妹カロラインは終始其傍らに侍べり或は器械を整へ時計を正し或は星圖の表を製し或は兄に代つて測量し「妾は只だ婢の如く兄上に仕るを樂しむ」と述懐し兄逝くの後ちは尚ほ其一子を愛護して遂に之を天文學者と爲し以て其兄其父の志を嗣がしめたり、又彼の詩人チッヂルスは佛國の戰爭に加擔したるが一敗餘命を荷ふて英國に歸りたるより日夜怏々として樂しまず万事を抛つて只だ不平憂鬱に日を消したり此時若し妹ドロセーなくんば十九世紀前後恐らく此の高尚絶倫の詩聖を得ざりしとあらん然るにドロセーは兄の失望を慰さめて僅かに之に望を得させ其落膽を慰やして漸やく之が志を引立て遂に詩草の事に力を盡さしめたり故に其身は兄に扶持して之が万事の不自由を辨じチッヂルスをして一意に天然の面白味を感悟せしむることを務めたりきチッヂルスの吟に云く

歌つくる　わざは此世に　たゞひとつ　われに殘せし
わざならめ　はかなき我を　讃り上げて　うたつくりとは
われをなす　めぐみは妹が　愛なりき

又シドチー兄妹の交りの如き殊に尤も優美なるものあり其好む所ろ其思ふ所ろ悉く相ひ一致し共に與に力を合わせて詩を咏ずることを樂しみとせり故にシドチーは妹の爲めに有名のアルカヂアを著し之に序して云く

此書中に收むる詩の如きは譬へば猶ほ蜘蛛の巣の如し寧ろ風に吹かれて破れ去るとも亦た之を他に用ゆべきにハ非ざるが如し然れども妹、君すでに之を編輯せんことを望まる君が望みは余に取つて命令に齊しければ扨ては遂に此書あるに至りたりと

而して此書の咏草の中には兄妹和樂の愉快を咏じたるもの甚だ多く今に至るまで讀者に同胞の愛を感悟せしむるものあり斯て妹マーリーは亦た兄を愛し兄を敬して彼のパストーラル

ダイアログウ(野話)の詩を作り又たドールフール、レー、チフツラッンダなど云へる詩を吟じ共に之を兄を懷ふが爲めの捧げものとは爲したり、此外チャーレスラムブ兄妹の如き及び獨乙人カルナー兄妹の如き何れも皆な一讀人をして涙にむせばしむるの傳あり吾人異日之を精しく叙するの日あらん要するに此等の美談を思ひ起す毎に我國當今の兄妹の交際の甚はだ冷膽至極なるを歎ぜずんばあらず、われは世上に男女同伴の遊び多く行はれんに先だち先づ兄妹相ひ手を携さへて散歩逍遥するの實況を見んとを望む、われは男女交際の方法圓滑ならんとを望むに先だち先づ兄妹の牆に鬩がす外よく侮を防ぎ相思相愛同胞の同躰とならんとを望む、嗚呼わが姉よわが妹よ汝等はわれをして紳士たらしむる最良の教師也

●佳傳

○サイビリアの女傑

そもサイビリアの女傑と聞ゆるは其名をプラスコベ、ロパゥロフとなん呼ひなして父なる人はユクレーン家の裔を受けホンガリーに生る年若くしてオーストリアの戰爭に花々敷き功名をぞ揚げたりけるが戰罷み軍散じて贏を醫する未だ數旬ならざるに忽ち犯罪の尤を受けサイビリア謫流の身となりける元より其罪分明ならねども法官の不明政府の抑制請願空しく斥けられしかば妻子を携へ住み馴れし故園の花を後に見て楚雲秦月の間謫居の月を眺めんとは最とも可憐の至なり

さてサイビリアの地たる其廣さ殆んど亞細亞の三分一に當り魯府の管下に在り地北極に近くして寒威殊に甚しく烈風凍雪生息最も難ければ魯府此地を撰びて謫地とは定めぬ然れど幅員廣大の土地なれば其中自ら寒暖の差あり隨て生息の難易ありロパゥロフは幸にしてイシムの都に流されたりき茲處はサイビリアの以太利とも稱すべき地方の都なれど元來極北荒蕪の境なれば前を望むも廣原望涯なくして時に吼聲を聞き後を顧みるも江水天に連なりて僅か漁舟を見ずイルチス河は東に在りてトベル河は西に在り水枯れ石露はれ渉るべしと雖も瘦樹枯木風に號びて常さへ倘堪へ難きに况して花の都に住みし身の不平の思を懷きつゝ關山千里異域に入る人の心は如何ならん察しやられて餘あり

ロパゥロフは謫地に在り日に勞働苦使僅かに七錢の薄給を受く是も定りたる額なりと思へば致し方もなし赤貧洗ふが如き身の上なれば昔し不幸と悲しみし家族の少なきも今は却りて

幸福と思ふあるべし娘プラスコベは父母と諸共謫地に在れど年尚幼くして昨日の榮花も知らざれば今日の零落を悲しむ色なく年紀未た十二才に満たされど父母を助け參らせんとて隣の畑を耕へし村兒の衣を洗ひやり甲斐々々しくも働けど素より小女の事なれば僅かに卵子や青物類を獲る位にて穀物金錢を得ることは中々に稀なりき母も赤心を働まし身を窶つし忍ひ忍びて働けど父なる人は若年より武家に長ぜし壯武活氣の武將なれば身の不幸を恨むの情日に堪へ難く時に失望落膽の極に陷ることあるも道理なれ

斯る中にも幾年月を過せしが曾て朝吏のイシムを過ぐるに逢たればこれ幸と一書を認めサイピリア政府を經て魯皇陛下に哀願する所ありしが朝吏も大に其不幸を愍み應分の盡力致すべき旨約せしにぞ實に望ある事と思ひ一日千秋寛典の下るを待ちて歳又歳を重ねつゝ寒鴉の聲は聞とても一言半行の報書さへなければ更に失望の念を加へたりき時しも街上朝吏の來るを告けしかば是非此度は寛大の恩書玉はるべしと自ら信し喜び勇みし甲斐もなく空しく歸途に就たりければロパッロフは今更ら何んと致し方なく千恨万愁一時に迫り來りて漸く結びし情緒しも斷へなん計り茫然と色青白めて立てける

娘プラスコベは苅田より歸りしに其有様に打駭き身を投げやりて父の兩腕に縋り付きツゝ何故と咽ぶ涙と諸共に尋ねし情や強かりけん父は涙を噛みやりて娘か首を抱きしめ始めて語る身の來歴不幸の數々數へつゝ共に怨み嘆つゝドット其場に仆れけるこれぞプラスコベが父か謫流の身なるを知りし始めにして又之を救はんと志を立てし初めなりけり（未完）

○木村秀子の履歴

東京女子專門學校教頭木村秀子忽焉永逝す左は同子の親戚より聞取て筆記したるものなりとて某氏より寄送ありぬ其令妹の事に付ては嘗て本誌上に掲載したるとあり今再び如此き不幸の音を報ず遺恨無限なり

秀子の家譜を按ずるに其先南朝の后胤に出ず慶應三年大和國吉野に生る初め一姉二妹あり長を井登子と稱す妹を久重奈眞惠と唱ふ皆な言容温雅學を好み文を善す獨り秀女天質豪邁不羈頗ふる進取の氣象に富む男子に凌駕するの勢ひあり甫めて十歳姉妹四人笈を負ふて東京に遊ぶ某家塾に入り和漢學を修む秀子好んで史を誦し能く本朝の歴史に通ず十一年加賀美某高橋秀松諸氏に從ひ醫學を修む翌年東亞醫學校に入り遂ひに醫學全科を了修す常に人に談て曰く我國女子の風俗靡萎振

いず男尊女卑の弊其來るや久矣今や雜居近きにあり今にして女子社會の改良を計らずんバ將た何の日か同權の美果を見んと慨然として其奬勵者たらんことを誓ふ於是日夜獨英の語學を研究す夙夜孳々螢雪の苦を嘗む未だ曾て綺羅身を纒ひ粉脂面を裝ふことを爲さず十七年女子の醫術開業試驗を內務省に出願す是れ本朝女子醫術試驗を受くるの嚆矢と謂ふべきなり翌年妹久重子と計り共に大學に上書して入學を請願すると前後數回然れども我國未だ女子大學に入るの制なきを以て許されず其後受驗の上高等中學に入らんことを出願せしも亦た許されず依て自から文部大臣に謁して衷情を吐露するに至る因て同年帝國大學撰科に入るへきの許可を得たり是れ實に本朝女子大學入校志願の嚆矢とす是より曩き姉井登子疾に罹て歿す此年八月妹久重子亦た歿す秀子が心膽鐵石の如きも嗚呼豈に寸斷せざらんや然れども酸辛を嘗め志操愈々堅く廿年一月東京女子專門學校を小石川區に設立す纖弱の身を以て百般の校務に當り傍ら獨英の語學を敎授し又男女交際會の必要を悟り自から其幹事となり女子の風俗を改進するを以て己れが任と爲す然れども時未だ至らざるか女子の來て專門學を修むるもの寥々曉天の星の如し依て又以爲らく女子敎育の書を翻譯して博く天下に裨益するに如かずと因て翻譯に從事す今年六月神氣甚だ倦怠するを覺ゆ然れども尙ほ勉めて學に從事す既に草稿を脫するの書二三に及ぶ出版の期將さに近きに在らんとせしも天此女に付すに歲を以てせず十月に至り疾甚だ篤し妹奈良惠子を枕邊に招き遺志を繼ぐべきを委囑し遂に逝矣時に歲二十なり著はす所の書あり交際論と題す議論正確筆力雄健病中の筆に似ず亦た以て秀子の志操を知るに足るべきなり

● 小說

○薔薇の香

第十七回　香氣復散し　心緒還元す　月の舍　しのぶ

時に人々ひつそとして聲なし敎師は花を盖ひたる棺の傍に出で雙手を擧げ

全知全能の主なる神、今ま吾等が敬愛する姉妹の御前に招かれたるを謝し其の靈を送り其肉を葬むりあなたが吾等に示し玉ふ惣ての御敎を蒙らんとす願くは此の集會を御心の儘に爲し玉へ、アーメン

贊美歌九十五番

たのしきくにあり　きよきともは　うきことわすれて　そこにぞすまん。
とこしへのはるに　つきせぬはな　にほへるところぞ　わがくになる。

うのくにへわたる　うみぢちかし　人はきしべにたち　なほまよへり。
まよひのくもきり　はれわたりて　みくにみえぬれば　われおそれじ。

聖書馬太傳第六章二十五節

是故に我なんぢらに告ん生命の爲に何を食ひ何を飲みまた身躰の爲に何を衣んと思ひ煩ふ勿れ生命は糧より優り身躰は衣よりも優れるものならず乎なんぢら天空の鳥を見よ稼くことなく穡ことをせず倉に蓄ふることなし然るに爾曹の天の父は之を養ひ玉へり爾曹之よりも大に勝るゝものならず乎爾曹のうち誰か能くおもひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んやまた何故に衣のことを思ひわづらふや野の百合花は何如にして長つかを思へ勞めず紡がざる也われ爾曹に告んソロモンの榮華の極みの時だにも其裝ひこの花の一つに及ばざりき神は今日野に在て明日爐に投入らるゝ草をも如此よそはせ給へば況て爾曹をや

贊美歌七十四番

なみかぜのあらき　うきよをたちさり　のがるゝところぞ　惠みのしたなる。
あゝ耶蘇と我らが　すむべきところは　このよにまさりて　樂しきくになり。

青山哲はしづ〳〵として歩み出で蒼白の面に沈着深思の色を現はし穏やかに一揖して會葬者に對し

友人白河光君の棺前に立まして同君一生の事に付て少か思ふ所を述ぶるは非常の喜びで御座ります、私は同君と交ると僅かに半年では在まするが此間だに凡そ友人として知り得べき丈けの事を同君の全身内に窺ひ盡したりと信じますれバ外にも御交際の厚かりし諸君の甚だ多いにも係はりませず敢て自から申上るとであります。一言するに此白河さんは心に於ては一個の哲學者、情に於ては優渥なる婦人でありました。其の考への深く且つ新あると、其の望みの遠く且つ高きと、同胞姉妹を憂ふるの念の甚だ强かりしと、一個の品格地位を保つの勇に富まれたる事、私供が平生尤も敬服する所でありました。然し亦た其の思ひの切にして愛の深かりしと、人を信じて之に委頼する所の清かりし事、慷慨の涙だ喜びの涙だ凡そ情の感覺に迫まられて胸を割く程に思はれたる塲合の屢ばなりし事等は大方君が尤も親密なる友人の外は承知せられざる所ならんかと思はれます。承たまわりまするに同君の父は肥後熊本藩の方で學力見識を以て彼地に知られたる人で在りましたが彼の明治十年の際大義を守つて賊徒に加黨せられざりしのみか屢ば西郷等に書を送りて之を諫められたる程なりしより若手の内に之を惡むもの多く出來まして之を存するときは其軍氣を阻むとあらんと云つて遂に殺害いたしました、其時同君は兼て此事あらんと察せられて令閨及び此の光君を隣人等と共に山に逃れしめて獨り家に留まつて居られたるとゆへ、書室に机に對ひ深夜靜かに讀書さるゝ所を暗殺されたと申すとで實に殘念の事でありました、其故光君は其母人と共に當家へ參られ非常の志を立て勉學されたるうち今年春又もや

彼の母人は沒せられたるが今に至つて又々光君を失ふことゝなりました人世の變化實に計られんことであります。光君の學才、見識、自重、品行、凡ろ此等の諸德が若しも彌よ發達しましたとならば定めし女流惣躰の上に取て著しき効益ありしことゝ信ぜられますが、神が世を治しめすの方は固より吾々の窺がひ知り難き所であつて只だ万事宜しきに進むことゝ信ずるの外ないことゝ存じます。私は此の友人を失ひ……此の尤も敬服する所の友人を失ひ固より言ひ盡しがたきの憾を懷くものでは在ますが之に依ていよ〳〵固く神の敎を悟ることを得るを感謝し且つ此の死せる白河さんの無き骸は其の俗世に存らへて私供に敎へを與ふるよりも更に大なる所の敎を與へらるゝものとして少さか思ひを慰さむるものであります

哲が少さか口隱るときは會葬者の呼吸則ち迫塞す、哲が見張りたる眼に一點の雫を懸るときは會葬者の涙則ち雨の如く下る、中にも波羅香は最初より泣き伏して面を揚げ得ず妹榮は只だ折々に兄の面を見て頻りに苦慮するものゝ如し

讃美歌七十四番

みじかきこのよの　たびのともよ　しばしはわかれて　はなるゝとも。
ふたゝびあひてや　ともにかたらん　こゝろをおとざで　いさみすゝめ。
たまのとびらきて　ちゝはともの　きたるをいまやと　まちたまへり。
あとにおくれて　ともをみやる　こゝろはみくにの　きしまでゆかん。

敎師うや〳〵しく立つて再び祈禱をさゝぐ

父なる神よ、此の果敢なき此の頼みなき世に於て常も變はることなく吾等を愛し玉ふが故に感謝す、此の迷はし多き誘ひ多き世に於て吾等に大ひなる光を與へ玉ふが故に感謝す何事も亡び何物も悉く失する間だに於て吾等の靈を永遠に存在せしめ吾等の愛を永遠に殘らせ吾等をして限りなく靈の交りを爲させ玉ふが故に感謝す、今ま吾等の愛する姉妹は御前に至らんとす吾等之を送るとき吾等に信仰を保たせて吾等の思ひを慰さむることを得るが故に感謝す、今ま此の大ひなる敎へを與へ玉ふとき吾等は之を御惠みとして之を受け其御敎へを消すことなきを得るが故に感謝す、此の姉妹は今ま忽ち御前に招かれたれども其一生の行ひの中ちあなたの御榮を顯はすに足るものありて其効能の久しきに續かんが故に感謝す、願くは惣ての人類此の姉妹の如く生き此姉妹の如く招かれ此世に存すること一日の短きと雖ども能く御心に適つて其一生を終ることの出來るように導かせ玉はんことを、アーメン

此れより棺の前頭の戸を開らひて會葬者一々別離の見を爲す

最後に青山哲、波羅香、青山桑棺に近きおぼろなる目を上てそも之を瞥見すれば死者の容貌もとより痩たりと云ど殆んど生前に異らず薔薇の花四周をつゝみ白き顔ばせ眼を閉づ（大尾）

●寄書

○明治女學校献堂式祝文

太田きん子

熟ら惟みるに。わが國むかし支那孔孟のおしへを採りてこゝに用ゐ給ひしより。男ハ尊く女ハ卑きものゝ如くなりて。上帝より等しく與へ玉へる權理なといふことわりも。獨り男の手にのみ握りて。女ハからうして召しつかはるゝ婢のたぐひとハなりき故。さては學の道も大かたハ男の上にのみ行へるゝが故に。男ハますく\等高くなりゆくも。女ハなほ母のもとにありて頑なるをしへを守りつゝ。窓のとにも出いでねば。いかで世のさまをうかゞひ知るべき。ますく\愚かにのみなりゆきて。いよく\等卑りにべければども。大かたの女等ハこれを甘して慷慨の念ひもなく。抑てこれを見て女の徳になんなどいひはやせり。左れば偶ま雄々しき女のよにいでゝ。これを惡めむとするも。習慣の久しきが故に。これを視ていみしう操を破れりなどいひくたしけり。然るにこゝに

明治の大御世となりにたるより恩澤四方にあまねくて。女の學術も漸くさかりならんとして。今は早や昔の如くならねば。女流にもみづから悲ひて教の事に力を盡さんとするものいとさはなるが中に。わが木村の鐙子刀自なんこゝに生れあひ給ひて頗るをゝしき志をもち。汎く愛しむの性質ましくければ。今の女の卑野をあはれみいかで高尚のきはゝ奬めてましとて。斯の明治女學校をそいとなまれける。されども僅かに進まんとして踏ふみ違ふることのあらんを恐れ。和英學課の外に何くれの技藝をさへ加へて。女子の品位を高からしめ。その貞操を養なハしめて。善良なる美德を保持さしめんと。晝ハひめもす夜もすがらにぞ勉勵られ玉へける。まて刀自のみ心かく懇切なれば。始めハかたばかりの學校なりけるに。刀自のみ心のまにく\生徒の員も日に加へり。教道も月に旺盛になりきて。刀自のよろこびハ御顔の色にさへあらハるゝばかりなるに。いかにし玉へる事にか有けん忽焉としてかへらぬ旅にうつろひ玉ひぬ。是に於て生徒等がよろこびハ忽ちに變りて火の消ぬるが如く。校中震動てかなしみしが。かくていつまでか生徒らを暗夜にたゞよはさんとて。幹事の君等刀自の志をつぎていよく\つとめ給ひければ。今ハ教を受るもの日一日よりも多ほく校舎もいとこゝろよくおぼゆれば。こたび眞地をトしてさらに新たに遣營まれしが。今やうく\なりはてたりとて。今日なんその献堂式を行ひ給ふなりける。妹等首をめぐらして鐙子刀自の昨日をおもへば。刀自のおもかげハなほ髣髴として眼前にのこり。刀自のをしへハ依然として校舍の壁にあり。さてハ今日の此の祝宴の席にも刀自が聖靈ハ天かけりて來り在すなるべしと思へば。うれしさも一層まさる心ちせらるゝ也。時ハ明治の二十年といふにあたりて。滿日の雨十日の風も規則をたがへねば。秋のみのりのいちしるくて。四方のたみやさ萬歲を唱ふる聲たゆぬに。吹おくる桂の香ハ席間にあふれ。咲匂ふ菊の錦ハ机上にうづ高し。いでや本校の衆の姉君よ刀自の雄々しき心を心とし。刀自の美ハしき操を操とし。刀自の懇切なる志を志として。斯校の教則を忽諸にせず。いよく\勉勵めますく\勤勉みて。才をやしなひ智をみがきなば。いかに等高き男にもたち竝ぶまのかたからん。さてこそハ始めて男ハ尊く女ハ卑しきの習慣をあらためて。彼の上より與へ玉へられし權理をも。男どちとおなしほどに手握らるゝ事とハなりぬべし。嗚呼妹等ハかゝるありがたき大御代に生れあひ。このなのめならぬ學校に入り。はためでたき今日の祝宴にあへること。そもく\妹等が受け得し幸の中にもいかにふかきめくみの御蔭ならんも。いとよろこばしさの餘りにつたなき筆もうちわすれてかくなむ。預科二年生太田きん謹みて白す

○大日本婦人衛生會

諸女子よ明治初年より星移り世替り洋學開け婦人方の修學多く近頃種々の會起りて大に婦人の面目を改めど如何せん我身體の大切を語る者なし實に慨息の至なり抑も人ハ只徒に此の世に生活し滿足す可き時ならず天賦の能力を發達し高尚の生活を營むハ各女子の好みならん然れども我身體の健康を要すその道他なし衛生にありと妾の持論なりき茲に大日本婦人衛生會（麹町區三番町九番地にあります）の設けあり趣意書規則書を閲す結構一寸摘めハ薬店社會の婦女子すら衛生の何たるを知り自ら守らしむるにありて毎月一回脈々洗濯看病調理育兒法など大小を問ハず衛生上要件漏さず理解し易く講演し雜誌に載て全國に及し偶なく本邦の婦女子に讀ましめあまねく衛生法をして漸次婦人社會に擴張するにあり妾思ふ恐らくハ婦人諸會中鴻益之が右に出するなしと信じて疑ハず實に今日此の大會の設けあらんとハ賛成のあまり乞ふ願くハ各婦女子よ賛成加會し本會をして東京に輝やかしめよ

在京　衛生熱心女生　S. W. O. T.

○慈善の利害

早川狂狷

現今の日本ハ徳川時代の日本に非ず十九世紀の新日本なり宜しく社會の事物を改良して新社會を作るべしとの說一度出しより或ハ羅馬字、假名の會或ハ禁酒、慈善會等盛んに起り一方に言文一致を唱ふるあれば他にハ演劇改良を主張するあり衣服、食物、家屋、婦人の改良說續々まして四方に起り恰も鼎沸とも云べき勢をなせり而て顧みて之を主唱する所の人を見れば大抵ハ學者の間に於て頭角を顯はしたるの人にして其說の因て生し來りたる源因を尋ぬるに外國の刺擊に外ならざるなり遙かに西洋諸國の狀況を見るに事毎に整頓し物毎に優美ならざるハなし翻て吾國

を見れば漸やく文明の空氣を呼吸せしのみにて全社會盡く不完全の者ならざるはなし故に彼の社會の上位に居るの人は之を見るに忍びず强て改良說を主張したるにて決して人民一般の必要より生したるに非るなり決して社會多數人民の主唱に非るなり（何となれば人民の智識と社會の富と能く改良を實行するを得る程度に達したるや否や知る可らざればなり）或は社會多數人即ち下流に位する人種に適切ならざるあり或は此種類の人民の力に應ぜざるあり故に一時の流行に從て發生きたりし改良說も大抵萎靡不振恰も幽靈の如く人をして有りや無しやに迷はしむるに至れり

夫れ人は流行的の動物なり流行に從て進退し流行に從て始終す其政治上に於ける社交上に於ける又自己の生計上に於ける皆な流行の波中に漂泊せざる者なし而して此多き流行中如何なる者が尤も勢力を得又尤も永久に持續するか蓋し人民一般の利害に適切にして且つ其施行に至ても甚だ困難ならざる者尤も勢力を得永久に繼續するを得るなり若し之を疑ふ者あらば彼の束髮を見よ其便と益とは能く習慣と美術とを干城となしたる結髮を壓倒したるに非ずや

實に前に述るが如く容易に爲し易くして尤も人民に適切なる者は社會に於て勢力を得るなり此原則に合ふ者は榮へ之れに違ふ者は衰ふ然らば前改良論中此原則に適したる者あるか曰くあり婦人改良論是なり此婦人改良論は人民一般目下に於て極めて適切の問題にして且つ之を施すの手段も甚だ困難ならざるを以て漸やく社會に勢力を得駸々として進步するの有樣なり彼の女學校又は女學の雜誌の隆興を見ても知るべきなり

此婦人改良說の盛んに勢力を得ると同時に從て其流行の勢を社會に逞ふせし者あり則ち慈善の事是なり余新聞に付て近日の狀況を見るに東京を始め大坂其他處々に慈善會を開き汲々として貧民救助に盡力せらるゝ如し斯の如くにして一兩年を經過せバ日本全國慈善會を見ざるの地なきに至らん實に盛んなりと云ふべし此時に際して吾々の此慈善なる者は婦人目下の急務なるか又社會に對して如何なる影響を與ふるかを究考ふるは緊要の問題なりと云ふべし

抑も慈善なる者は婦人に於て尤も必要なる者なり夫れ婦人は感情に因て支配さるゝ者なり而して感情は理想を破却する者なり故に婦人の腦中には理想常に逍出せんとするの傾あり理想已に去るときは私利直ちに之れに乘するは免る可らざるの弱點なり是を以て婦人は私利の爲めに腦裏を亂さんとするの有樣ありと斷言するを得べし且つ婦人の生活は一家の內にあり一親屬の內にあるのみ一家の生計一親屬間の交際に生を終る者なり故に社會一般の利害に至ては關係をなさゝるを以て甚だ冷淡ならざるを得ず從て公共の利益と云ふ思想は其胸中にあらずして私利の淵叢となるに至るべきなり婦人の生活は斯の如し之を救濟するの道如何すべきや即ち彼の婦人の腦中を支配する所の感情を利用して之に慈善をなさしむるの一策あるのみ慈善の心は仁愛の情に因て生ずるなり而して仁愛と私利心とは並び立たざる者なるを以て慈善にして婦人間に行はるゝに至らバ私利の惡むべき心は自から婦人の腦中より驅逐さるべし故に慈善は婦人に向ては尤も必要なる者と云ふべし

而して今慈善とは如何なる意味を有するかと問ふときは大抵の人は之を救貧と解するが如し若し慈善をして此意味ならしめバ余は一日も早く此階の社會に止まらざらんことを希望するなり何となれば慈善は貧困と云ふ階に基いて生ずるものなれバなり若し貧困社會を去らバ慈善も亦社會に要なきに至るべし

蓋し貧困者の社會に生ずる源因は或は一家の不幸に依るもあり或は時の變更に因るもあるべしと雖ども其尤も重なる源因は怠惰にありと云はざる可らず彼の慈善は果して能く此源因を消滅するに足るか若し消滅する能はずとせば貧困は社會に絕たずして慈善は一時外面を補修するの措策たるを免れざるなり彼の老幼廢疾者にして自から食せんと欲して食する能はず終日饑に叫び終夜寒に泣くの狀況にある者は素より救助振恤せざる可らずと雖ども政府已に救恤の道を設くるあり豈に婦人今日の急務ならんや若し彼の五尺の健躰を有し尙ほ貧窮に苦辛するの徒を救恤するが如きは實に無益にして且つ怠惰を賛成するの結果を生ずるなり

實に貧困は怠惰に基す而して已に貧困に陷るや或は乞食となりて汚辱に安んずるもあるべしと雖ども多くは種々の職業を求めて自活をなさんとの勉勵心を起す者なるべし此時に當て婦人此社會に來り手に慈善の財嚢を振て呼て曰く來れ汝不幸者よ汝は吾兄弟として尤も哀むべき尤も痛むべき者なり之を與へて汝を救わん來て此財嚢を取れと斯の如きと盛かんに行わるゝに至らば貧困者自から思ふべし余勉勵して自活を計るも其利少なくして躰を安んずるに足らず然るに今勞せず働せず此利を受るを得何を苦んてか又勞働をなさんと一旦の勉勵心も忽ち怠惰の念と變じ人に依賴して衣食するの卑屈心を生じ乞食社會に陷り少しも恥とせざるのみならず遂には「乞食三日其樂は生を終る迄忘るべからず」との諺をなさしむるに至る嗚呼此に至て所謂慈善なる者の社會に及ぼす影響は利と云ふべきか害と云ふべきか余が言を待たずして明かなるべし

左なきだに劣等人の僻として目前の快樂に走りて永遠の慮をなさず「衣服質に入れ初鰹魚」と云ふの有樣なるを以て貧益々貧を加へんとす然るに今勉强心を挫ぎて卑屈心を起さしむるの事をなさば其弊害言ふに堪ざるに至るべし

讀て此に至らば諸君は慈善は今日婦人の急務に非ずして社會に弊害を及ぼす者なるとを首肯せらるゝなるべし

然らバ則ち慈善廢すべきか曰く慈善は婦人に於て要用一日も欠く可らざる者なり決して廢す可らず只だ慈善の方法を轉じ救貧を棄てゝ貧窮に陷りたる源因を救治するの策即ち敎育の事に盡力されんとを望むなり夫れ救貧の財嚢は以て學校を興すべく以て敎會を立つるを得べし自から之れに從事するの淑女は以て敎師たるべく以て傳道師たるべし一方に身を以て之に當るあれば一方には財を集めて之れに資するあり以て吾三千八百萬同胞の敎育を盛んにし彼の劣等人を導て智識を研き道德を高からしむべし然るときは目前の快樂に走るの弊怠惰に流るゝの害防ぐを

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

得べく界屈に甘んずるの霹救ふを得べし是に於て救貧の實全く[illegible]に至る其効其益廣大なりと云ふべし若し斯の如くんバ慈善會よ盛にして社會益々其利を蒙らん

均しく之れ慈善なり而して其差違斯の如し[illegible]前者ハ猶ほ水の溢るゝに及んで流を止めんと欲する者なり後者ハ其源[illegible]其沸を止る時ハ却て洪水汎濫の害を生ずべし故に偶に望らくハ婦人改良に從事する諸士慈善に熱心なる淑女能く其利害を察して其源を防で功德を社會に與へられんことを

●新報

○婦人矯風會大演說　去る三日午後二時より木挽町厚生館に於て開かる津田仙（酒の害）串田ちげ（婦人矯風會の隆盛を望む）湯淺ハつ（四海皆兄弟也）フルベツキ（婦人矯風會の目的）佐々木とよ（婦人矯風會の爲に辯ず）等の諸氏演說あり聽衆一千餘名餘程の盛會なりき殊に諸兄が親切なる演說並に諸姉が慷慨胸を刺すの演說等何れも人を感動せしめたり

○明治女學校獻堂式　去る五日午後二時より執行さる式場の順序等は諸新聞紙に見ゆるを以て別に記せず編者は四月以來此校の爲に相應の力を盡し且つ二ケ月前來新築及び校資募集の爲めに周旋する所ろ勘らず爲めに本誌の編輯上に十分の餘暇を存せず讀者の望に副へざりしを深く謝す但し既に獻堂式を了り校務略ぼ整頓したれば之れより讀者二ケ月間の寬容に報ゆる所あらんことを期す

右明治女學校は編者の關係甚だ淺からざるが故に本誌上に此校の事を記するを屑ぼず然れども此頃貴女之友に於て一言したるものあるが故に左ゞ之を揭げて以て自から記するの責を塞ぐと云ふ

麴町區飯田町三丁目九段坂上右側に宏壯輪奐空に聳へ巍々として輝くハ是なん今度新築功を奏したる明治女學校の校舍にして同校ハ去る明治十八年創立以來種々の沿革ありしかども入學の生徒年を追ふて增加し益々盛大に赴き同校の薫陶を受けて〇〇したる有爲の女子も尠からざるが是迄の校舍にてハ狹隘を告ぐるを以て一層規模を擴張せん爲め今の場所に地を相し今春來此校舍寄宿舍の新築にとりかゝり此の程落成し內外の校務も萬事頗ぶる整頓したれば寄宿生徒八十名を許し新入生徒をも募り尙將來永遠の校基を强固にせんが爲め一編の校資募集目趣書を草し世の特志者に頗ち贊成を求められたり（其目趣書は次號に揭ぐべし）今同校の現任職員を聞くに校長ハ即ち同校創立主たる神學士木村熊二氏にして教頭ハ女學雜誌社長の巖本善治氏なれば此勢にして進歩せば日本女學の爲將來大いに望を屬すべきの眞學校となるならん

○私立大日本婦人衞生會　同會は汎く婦女子を誘導して人生の健康を保持するの方法を講究し衞生上の智識を進歩せしめ社會の幸福を培養することを目的とするものにて每月一冊づゝ本會の雜誌を發し之に講義演說筆記等を揭ぐるよし而して現に發起員及び贊成員と爲れるもの左の如し

贊　三好梅子	發　加藤鈴子	贊　長與園子	贊　高木富子
發　南部隈子	贊　三宅藤子	贊　最上糸子	贊　金井竹子
贊　金井元子	發　大澤作子	發　原田時子	發　佐々木芳子
贊　樫村永子	贊　佐藤靜子	發　獮　幸子	贊　矢島揖子
發　村岡久野子	贊　設樂園子	贊　神田熊千代	贊　浦島貞子
贊　西郷鶴子	發　細川靜子	贊　德富靜子	發　松浦里子
發　荻野吟子	贊　兩角照子	贊　志賀八重子	贊　鈴木虎子
贊　松本武子	發　太田幾子	發　岡田美壽子	

○佐賀縣佐賀女子高等尋常小學校履歷　該地にハ明治七年より女子小學校二校建立し有名無實の有樣にて衰頽に垂々たるも同十九年十二月聯合し更に撒敗校なる者を中央松原町に建立し生徒數も三百七拾餘なるに日に增加し同廿年九月には四百二拾餘あり抑該地ハ甚だ女子教育に乏しかりしが聯合後ハ人氣も少々進みたる都合にて當時着袴の娘となり又該校長洪悌次郎には生徒貯金趣意規則等認め其筋の許可を得本年四月一日より執行したり（佐賀縣佐賀郡與賀町江原暢一）

○授業囑托　帝國大學にてハ今度英國人アクニーズ、ヴエッチ女に本年十月より六ケ月間醫科大學第一醫院看病法講義及び看病術實地練習を囑托せり

○西洋家事敎場　兼て本誌上に揭載したる高等女學校內に新設せらるゝ同敎場は此頃落成したるに付き去る五日其開場式を行はれたり同場へ寄宿を乞ふものは入費大抵月に十五圓にて可なるべし凡そ十人迄では差當り許可せらるゝよし洋地に渡らずして此地に西洋の家風を學ぶと便利至極の事と云ふべし

○跡見女學校　豫て新築中なりし小石川區柳町の跡見女學校へ去る三日上棟式を執行したり來會するものは京濱間の令孃紳士等多く中々の盛式なりしと

○横濱の紀念學校　英國女皇即位五十年祭の紀念のため新築したる横濱居留地百七十一番館の學校ハ去る五日其開校式を行ひたるが沖神奈川縣知事在港各國領事其他內外の紳士淑女を招待し盛んなる宴を張り餘興には煙火をも打揚たり

○華族女學校の新築　華族女學校は今度赤坂門內なる舊松平出羽守邸內（雲州邸）へ新築することに決し工費豫算は十萬圓にして工學士新家孝正氏が計畫し工事ハ日本土木會社が引受けたる由にて已ゞ地均に着手せり構造は煉化造にして來年四月迄には落成せしむるとの事なり

○スチルジス女學校　長崎港居留地東山手なる十四番地に新設したるスチルジス女學校にては英語教師ブロコー女史の外更に米國ニューヨーク府に於て十八年間女學校の教師たりしオルピン女史を聘したる由にて同女史ハ此程來朝したりと云ふ聞く同女史ハ年齡殆んど四十に近く餘程老練教育家の聞へ高く爲めに米國リフホームドミションにてハ其才幹日本婦人の教育に適當なるを以て今般特撰して來航せしめたる趣きなり

○京都看病婦學校　曾て建築中なる京都看病婦學校ハ來る十五日を以て開校式を行ひ當日ハ米國公使を始め近府縣の高等官にも臨席を乞ふ答なる由

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

西洋女大學

内大臣三條公特書題辭
技藝學士末松謙澄君序
博士イビー君夫人序文
英國ラトクリフ夫人著
日本片岡信譯述

上篇 四十錢
下篇 四十錢
送費不要

●本書は夙に歐米貴女社會に敬愛せられたる良好完全の教科書なり其教育上に功績あるは今更喋々を要せず弊店發賣の恩命を受く依て大方に謹告す

發兌元 東京日本橋通三丁目 丸善 賣捌 各書林

十一月五日發行

教育時論第九拾貳號目次

○肖像 フランシス、ウエーランド、パアカア氏 ○社說 小學校ノ校舍ヲ改築スルヲ要ス(下) ○教育 コメニウス氏教育說斑 ●町村理事者ニ望ム ●小學ノ兒童ナシテ社會ノ人タラシメヨ ●教育ト時事ノ關係 ●園藝的遊戲記 ●理科 フラヴヒオ、ジオヤ羅鍼盤ノ發明 ●千八百三十六年以降化學ノ進歩 ○文藝 和歌、詩文、傳記 ○內外雜纂 教育時論誤テ賞辭ヲ忝フス外珍聞快報凡卅件 ○官報抄錄 省令、敍任辭令等

本誌定價一冊五錢 限見本郵劵不苦

東京下谷區練屏町 開發社

●女學雜誌社出版書目

つれ〴〵草講義

定價十二錢 郵税四錢 第一號

○鈴木弘恭君講述○山村亮作君筆記

右は鈴木弘恭君の講義ありたるを山村君の筆記せられたるものにして其解釋の綿密なる一本を机上に備ふる時は五里の霧中を出でゝ靄晴朗々たるの天色を見る心地す四方の貴娘諸子請ふ續々購讀あらん事を

婚姻論

○統計局次長世良太一君序○統計協會議員吳文聰君序

○朝野新聞記者 横山雅男君著

○定價一冊三十五錢郵便税十四錢

右は横山君が得意の統計學上より婚姻の定義其外早婚晩婚雜婚離婚などすべて婚姻に關係する事物は擧げて殘す所なく議論の確實なる擧例の精密なる世の父母たるものも亦た青年の男女の方々必讀の書なり

船越鼎太郎君著

產婦小兒 攝生法(新著)

一冊十八錢郵税四錢

右は產婦小兒の養生法を平易なる文章にて何方にも分り易き樣認めたる者なれども所論は一々學理に照して實際を鑑み專ら當今の養生法其道を盡さゞるとを敎へたり故に月經の心得より、妊娠したるか否やを知ると、出產の期日を知る法、妊娠中の養生法、產後の養生法、赤子のとりあつかひ、乳を飮まする間の養生法、母の乳を用ひずして子供を育つる法等ことぐく信切に敎へたり世の母たらん人は何卒一冊を座右に置きて最愛の生子を誤りて取扱ひ玉ふやうのとあからんを希ふ

束髮案內

美製小本八十頁細圖入
定價十五錢郵税四錢也

○渡邊鼎君著
○田口卯吉君結髮沿革附錄○和崎義路君校○巖本善治君跋

當今束髮流行の折柄其結び方不案內の婦人少からず此書ハ日本婦人に適する束髮二十餘種の結び方を丁寧に敎へ一々細圖を附して親切に案內すれバ何如ある僻遠の地に在りて束髮の風を知らざる人々も之に依て容易に自ら試るを得べし特に田口卯吉君の論文束髮會の規則其外をも添へたれば結髮改良に志ある人々ハ宜く一讀あるべし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

○鈴木弘恭大人著述○小中村清矩大人評

改正增補 **文法口授** 全一冊●一名和文獨案内 定價十八錢 郵税四錢

此書は文章家なる鈴木大人か多年諸學校の生徒に和作文を授業せられしを筆記したるものにて曩に出版したる所大に諸校の實用を得たれば尚亦今般大人に乞ひ改正增補して古人の文章數十篇を卷尾に付し或は雅文を俗文に譯し或は漢文を和文に譯したる作例をも擧げたり然れば啻和文のみならず漢文を學ぶ人の和文を漢文に譯するにも大に益あるべし且女學校などに於て和文を學ばんとする生徒諸君の爲めには此に過たる良書なかるべし

●右文法口授は學校敎科用の書籍に適當也とて發兌后一週日を經ざるに既に成立學舍女子部及び頌榮女學校並に明治女學校長桒女塾等の敎科書となりたり

中島湘煙女史著

善惡之岐 新刊 定價五拾錢 繪入美本

右は兼て本誌上に掲載仕たる中島俊子君か得意の快筆を以て編まれたる小說なるが此度これを一冊として出板せり編中には中川昇氏が精密なる銅板彫刻の美畫を加へ總ふりがな付きにて初學者と雖も容易に讀み得らるべき書なり四方の諸君希くは一本を購て同女史が意想の高きと其健筆を味はれん事を

女學雜誌社

賣捌所、(銀坐博聞社、原金港堂、)

明治女學校生徒募集幷びに新築落成廣告

本校漸次隆盛の域に進み從來の校舍非常の狹隘と相成り候に付き今般高燥の地をトし校舍を新築し略ぼ落成を告ぐ依て新入女生徒二十名の入學を許し且寄宿生三十名を募る精細の規則は附て承知あるべし○規則書御望みの御方は新橋日吉町八番地女學雜誌社へ宛て郵券二錢送附あれば直ちに發送すべし

東京麴町區飯田町三丁目三十二番地

明治女學校

發兌

九月。三日 十日 十七日 廿四日
十月。一日 八日 十五日 廿二日 廿九日
十一月。五日 十二日 十九日 廿六日
十二月。三日 十日 十七日 廿四日 三十一日

定價

一冊。五錢 郵税。一錢 (但府内無郵税)
十冊。四十八錢郵税。十錢 (同前)
半年分 一圓十七錢 府外は 一圓四十三錢
一年分 二圓卅四錢 府外は 二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記事を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲載する割に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行 一回 (廿七字詰) 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學に關係ある書籍は一部寄贈を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町巖々堂○東京芝西久保櫻川町萬春堂○東京神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新乾町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本鄉區元富士町盛春堂○同本鄉區春木町二丁目解明堂○東京本鄉四丁目文壽堂○橫濱住吉町角田屋貞○京都四條通小橋へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西內大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥平堂○勢州松坂家里初枝

發行所

東京京橋區日吉町八番地

本局 **女學雜誌社**

持主兼編輯 巖本善治

印刷 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8 HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, TŌKYŌ, Japan.